
VOL

6.11 2008 No.04

LAZZARATO Issue

eight pages

CONTENTS

表現とコミュニケーションの対立

マウリツィオ・ラッツァラート

Expression versus communication

村澤真保呂・中倉智徳 訳

Expression Versus communication Maurizio Lazzarato

表現とコミュニケーションの対立

マウリツィオ・ラッツァラート

村澤真保呂・中倉智徳 訳

「鉄道、旅行、移動、商業、郵便、電報、電話、新聞——それらすべては、ひとつの全体を維持するための類似した観念や感情を、人々のあいだにつくりだしている。なぜなら、それらは人々のあいだに相互作用と相互依存を引き起こしているからである…。現代のわれわれが国家的統一性をそなえるようになったのは、さまざまな世論と情報を迅速かつ容易に流通させるテクノロジーのおかげである…。しかし、機械の時代は、その間接的な効果を利用し、多様化し、強化し、複雑化し、人々の行為のあいだにきわめて遠距離かつ堅固な紐帯（これは非人間的な紐帯であり、共同体とは無縁である）をつくりだした。そして、その絆から生まれた公衆は、もはや自分自身が何者であるかを理解することも、識別することもできなくなってしまった」

ジョン・デューイ

かりにテレビの番組表から映画と連続ドラマを抜き去ったとしたら、もはやそこには発話のたえまない流れしか残っておらず、さらに残りの大半は会話（いわゆるトーク・ショー）で占められていることだろう。そこでは人々が、たとえば料理のレシピから科学の話題にいたるまで、あるいはサッカーの話題から文学の話題にいたるまで、なんでもかんでも話している。これらの会話にあるのは厳密な意味でのイメージではなく、むしろ映像と呼ぶべきものである。しかし、この映像というものを理解するにはどうすればよいのだろうか？ そのためには、テレビの報道番組やバラエティ放送を眺めながら、音を消してみただけで十分である。イメージがもつ感情的な（前言語的な）主体化に向かうベクトルは、そこに伴われていた言葉の流れによって無力化されている。ゴダール [フランスの映画監督。作品に「気違いピエロ」等] が述べるように、テレビとは、実のところ映像によって彩られたラジオなのである。

テレビにおいて、他者の発話はどうのように伝達されているのだろうか？ 行為は、ビデオのテクノロジーによって他者の発話から引き離され、中央集権的で統一的なテレビ言語の権力によって、つまり表現形態を均質化する権力によって、まるごと包囲されている。そもそも最初から、テレビは国家の独占物であるか（ヨーロッパのように）、あるいはコミュニケーション関連の私企業の独占物であった（合州国のように）。その後のテレビは、モノド間の相互表現や相互捕獲を可能にし

たはずのビデオというテクノロジー装置を、出来事にそなわる関係を一方的に捕獲し無力化するための中央集権的な政治装置へと変容させていった。こうして、発話の共同的創造と共同の実現は、いまやたんなる情報の流通へと成り下がってしまった。ビデオにそなわる複数言語主義的なポテンシャルは、単一言語主義によって打ち負かされてしまった。

テレビは、さまざまな言説の間接的な源泉になることを意図している。つまり、名前も姿も知らない多数の視聴者にたいして、みずからが中心になって、イメージや情報、発話を一方的に伝達するシステムとして機能している。テレビは多数の視聴者から、反応のあらゆる可能性を、相互性のあらゆる可能性を、出来事との出会いのあらゆる可能性を奪い去る。テレビはモノダたちを、協働の潜在的協力者にするのではなく、公衆／顧客にしてしまうのである。

さまざまな可能世界の共同的創造と共同の実現という活動は、脳の協働にそなわる特徴のひとつである。しかし、その活動は、多数のバラバラな精神や脳に向かって中心部から一方的に放送するという、単純な行為へと矮小化される。このようにして、相互的 領有の装置（芸術家たちの主張によれば、その装置は、ビデオの存在論的な一貫性を構成するものである）にたいする暴力的な破壊がおこなわれる。「テクノロジーの実存という観点からすると、ビデオという技術によって、われわれの反応を要求する電話やレーダー装置のような機器が使われる時代が近づいている。将来のわれわれは、そのような機器がなければコミュニケーションが中断されてしまうだけでなく、コミュニケーションを開始することさえできなくなるだろう」。

他のさまざまな脳を把握し、捕獲する可能性は、各モノドを動的に編成する力である。しかし、その力はある装置によって一箇所にまとめられ、収容されてしまう。その装置は、個人のマイナー性が活動するさまざまな領域を、流れとネットワークを分離／接合する権力で覆ってしまうのである。人類の歴史上、これほどまでに意味論的かつ言語的な、そして集中的かつ拡大的な権力は、かつて存在したことがなかった。

テレビが覆い尽くし、規格化し、コントロールしようとするのは、「言表の真の場、つまり、そこでこそ言表がつくれ、生きつづけるような場」である。パフチンによれば、そこは「言語のように匿名的で社会的であるが、しかし個人の言表のように具体的で内容が詰まっている、そのような対話的複数言語性の場である」。

テレビは、単一言語主義による中央集権化と組織化をつうじて、マジョリティを構成し、平均的人間をつくりだすための機械となる。その機械がつくりだすのは、特異性の動的編成やマイノリティの増殖に向かうような主観性ではなく、反対に、あらゆる生成変化が無力化されてしまっている画一的な主観性である。視聴率調査は平均的人間をつくるための尺度となり、マジョリティの欲望と信念の平均値を計測する。平均的人間が構成されるのは、アダム・スミスが信じていたように経済的交換もたらした結果ではなく、コミュニケーション的交換の結果なのである。チャンネルや情報、放送局を減らすのは、視聴者にたいしてマーケティングと視聴率調査の計画によってあらかじめ定められた選択をさせるためであって、けっしてさまざまな可能性に開かれた選択肢を増やすためではない。それはコミュニケーションを拡大することはあっても、創造性を拡大することはない。さらに、テレビによるコミュニケーションの拡大が主観性にたいして作用する仕方は、病理的と思われるほどである。そこでは、人々の主観性がさまざまな選択肢（人々がその選択肢にアクセスする手段をもってしている）のなかに放り込まれるのだが、当の人々の主観性はそれらの選択肢をつくることにまったく関与していないのである。

会話とナショナリズム

テレビは、ヨーロッパ人の単一言語主義的な傾向にもとづきながら、その傾向をさらに拡大させている。現在のテレビは、他者の言説の領域において、複数言語性がもたらす「圧力」を抑えつけ、政治的・経済的権力を展開するための装置となった。ここで抑圧されている複数言語性は、多数多様性をつくりあげ、多様な信念や欲望や知性をつくりあげるための条件として、さまざまな経済的条件と同じくらい重要なものである。テレビは、小説にみられるのとは正反対のプロセスを操っている。パフチンによれば、小説は、さまざまな文化的・意味的・表現的な意図が「単一言語というびきから解放される」

プロセスである。小説が「イデオロギー言語」の世界を脱中心化するのは、高度に差異化〔分化〕した社会集団を前提としており、その脱中心化は「他の社会集団とのあいだの緊張関係と相互関係のなか」でおこなわれる。小説によって生を与えられた言語的多数多様性は、さらに文学的次元における多数多様性を構築し、表現するものとなる。小説のこのような機能は、まさにテレビ・ネットワークの機能とは正反対である。対話主義、複数言語主義、ポリフォニー性は、遠心的な力の流れによって展開し、単一言語的な論理にたいして表現の内容と形態をぶつけることによって、その論理を打ち負かす。その単一言語的な論理を、われわれは「テレビの隠語」と呼ぶことができるかもしれない。テレビの隠語にそなわる価値観やアクセント、抑揚の変調は、声の多数多様性を横断しながら、そこに均質化をもたらすからである。

テレビにおいて重要なのは、もちろんインテリ言語ではなく、大衆の言語である。この大衆の言語がもたらす効果は、声の多様性、すなわち表現形態と意味形態の多数多様性を捕獲する能力のうちに、そして人々の記憶と関心を動かし「狂った分岐」のあらゆる可能性を無力化する能力のうちに、はっきりと示されている。その統一へと向かう力は、近代精神にもとづいてさまざまな方言や表現形態の異質性を解体した力（その流れはフランス革命によって驚異的に加速した）とは、連続していると同時に、断絶したものである。伝統的あるいは大衆的な方言や言葉、表現形態を抑圧することは、かつて近代国家を建設するための言語的条件であった（国内におけるマイナー文化・言語の植民地化）。それにたいして、言語の中央集権化のためにテレビや遠距離通信網を利用したのは、その次の段階のナショナリズムである。このような第二段階のナショナリズムは、ナチズムのそれと比較することができる。というのもナチズムにおいては、ラジオと映画が「ミクロ・ファシズム」を組織するために活用されたからである。その「柔軟かつ分子的な分割、あるいはイメージと音の流れ」は、「社会のあらゆる細胞を覆い尽くすことができる」³ほどであった。

かつてパゾリーニ〔1922-75、イタリアの映画監督。「ソドムの市場」等〕は、イタリアのテレビ放送は「ファシスト」の装置であると定義した。そのとき彼がみていたのは、第二次大戦後のイタリアで遅まきながら進行していた、第二段階の言語的中央集権化であった。

60年代のイタリアでは、カルヴィーノ〔1923-85、イタリアの小説家。「冬の夜ひとりの旅人が」等、実験的な作品を数多く発表〕とパゾリーニのあいだで、新しい資本主義と言語の関係をめぐる激しい論戦が繰り広げられていた。カルヴィーノは、新しい資本主義の力の中に「新しい表現」をつくりだす可能性をみとり、その力はイタリア語の貴族主義的で官僚主義的な構造を近代化するかもしれないと考えていた。これにたいしてパゾリーニは、新しい資本主義が人々の感覚を直接に狙い撃ちするものであることから、ファシスト的な統一よりもさらに全体主義的な、新しい中央集権化が起こる危険を強調した。われわれは、現代の新保守主義の流れが、最初にアメリカで（福音派によって）形成された後、次にイタリアで（ベルルスコーニ〔イタリアの実業家、首相（現在、3度目の就任）。5大民放キー局のうち3局を所有する「メディア王」である〕によって）テレビをつうじて広まったことに注意すべきだろう（ちなみに、新保守主義はアメリカでも同様にラジオをつうじて広められた）。

しかし、パゾリーニとカルヴィーノは、二人とも表現の政治にそなわる二つの基本的側面を見逃していた。それは20年後のわれわれが、現代のインターネットの政治の中心に見いだす二つの側面である。つまり、ひとつめは言語的・意味的な多数多様性であり、ふたつめは表現のテクノロジー装置の多数多様性であるが、この両者はペアになっているのである。したがって、マジョリティを破壊することは、コミュニケーション装置の（公的あるいは私的な）独占を破壊することとペアをなしている。遠心的な諸力は、（公的あるいは私的な）表現手段の独占を打ち砕き、脱中心化し、複数言語性を広めるためのテクノロジーを手に入れなければならない。

ロシア革命の時期、美学的であると同時にテクノロジー的、社会的であるような、ひとつの偉大な思想が現われた。それは、時間のテクノロジーをつうじて知覚や情動、会話、言語のミクロ政治を実践することに関連する思想であった。そのジガ・ヴェルトフ⁴〔1896-1954、ロシアの映画監督。当時では最先端の技法を多用した「カメラをもった男」(1929)でヨーロッパ全体に知られるようになったが、その映画でロシア政府から「形式主義」の烙印を押されて地位を追われた〕の仕事が、パフチンとその仲間たちの仕事と同じようにソヴェト政府の権力によって弾圧されたことは、革命運動にとって計り知れない損失であった。

パフチンは、カルヴィーノとパゾリーニが見逃した、別の大きな変容を考察した。その変容は、まさに現代のわれわれが

経験しているものである。複数言語性は、言語のグローバル化というプロセスの内部でしか、いいかえれば、異なる言語や文化の出会いという出来事のみでしか、広げることができない。抽象的な唯一のものとしての国民言語のなかには、「具体的世界の多数多様性」が息づいている。それは、自己と他者、そして世界の評価にかかわる多数多様性である。すでにパフチンは、それ自体のうちに閉じているような複数の国民言語が共存する時代は終わった、と述べている。さまざまな言語は相互に照らしあう関係にある。なぜなら、どの言語も他の言語に照らされなければ、自身を意識することができないからである。そして、そのような出会いは、世界規模でしか起こらない。「国民言語の内部に定着した（話し言葉）——つまりさまざまな田舎の方言、社会的・専門的な特殊用語や隠語、文学言語、あるいはそのほかのさまざまな言語——が素朴に共存するような時代は、もはや終わりを告げた。それらの言語はどれも変化の流れにあり、行為の過程のなかに入り込み、相互に照らし合うようになった⁵」。

言語学的かつ意味論的な脱中心化は、国民文化を乗り越えなければ実現されない。複数言語性へと向かうさまざまな力は、自閉したさまざまな文化の殻を破らなければ表現されない。「このような言葉とイデオロギーにかなする脱中心化が起こるためには、国民文化がその閉鎖的で自律的な特徴を失って、他のさまざまな文化と言語のあいだで自己自身を意識する必要がある⁶」。

時間のテクノロジー

「あなたは、人生の3万3000時間を学校で過ごし、6万3000時間を仕事のために費やし、さらに9万6000時間をテレビの前で過ごすだろう。つまり、この世にテレビが登場して以来、あなたはこれまでに自分が手に入れた人生の希望のすべてを、テレビに手渡していることになる」 ジャン・ヴィアール〔フランスの社会学者〕

コントロール社会において、ある頭脳から別の頭脳への遠隔作用をもたらす装置全体をまとめて定義するとしたら、それらは時間あるいは記憶にかかわるテクノロジーであるというしかないだろう。映画が登場して以来、われわれは、持続や経験的時間を創造し保存する、あるいは圧縮し展開するテクノロジー装置の進歩を目の当たりにしている。周知のとおり、持続や経験的時間は、記憶のさまざまな素材から構成され、生のうちに死を、未来のうちに過去を含み込んだものである。それにたいして、時間のテクノロジー装置は、人工的な持続をつくりだし、制御するものである。その装置は、人々の関心を動かし、「自然」な記憶の持続性に影響を与え、感覚の創造に介入する。その装置が人々の関心と記憶を動かしていることは、それが生体を動かすものであることを意味している。

時間のテクノロジー装置は、コントロール社会に特有の動力である。それは、王権社会における機械的な動力や、規律訓練社会における熱力学的な動力とは区別されるべきである。というのも、その装置は、離れた場所にあるさまざまな精神的習慣や、その構成要素である欲望と信念を動かすからである。

アンドレイ・タルコフスキー〔1932-86、旧ソ連の映画監督〕は、映画のテクノロジーについて次のように定義している。「芸術と文化の歴史のなかで、人間は初めて時間を固定するための手段を見つけた。それと同時に、いつでも望んだときにそこに立ち戻れるように、固定した時間を再生し、反復する手段も見つけた。そのとき人間は、現実時間の原型となるものを手に入れたのである。目にした光景は、ひとたび固定されたら、その後、その時間は銀色の箱のなかに、そして論理的には永遠に、保存されることになる⁷」。

しかし、その「現実時間の原型」にふさわしいテクノロジーが見いだされるには、ビデオが登場するのを待たねばならなかった。そしてビデオを経由することで、映画からコンピュータへの移行が可能になったのである。われわれは、そのような機械的記憶の進歩を目の当たりにしている。機械的記憶は、時間を創造し、反復し、維持する力を、つまり時間に介入

する力をもつようになった。さらに、それは時間をもつ力を、つまり影響を与えるとともに影響を受ける（つまり感じる）力をそなえるほどになった。そのような機械的記憶は、生体の活動力を減退させるほどの力を、つまり人間の記憶がもつ保存や創造の力を減少させるほどの力をそなえている。

「最初に登場した（ビデオテープ付きの）ビデオカメラは、なんでもかんでも粗雑に記憶する〈目〉をわれわれにもたらした。現代のわれわれは、それよりもさらに進歩した新しい段階にいる。つまり、われわれがいるのは、人工的ではあるが知的な思想を知覚し、構築する時代なのである⁸⁾。ビル・ヴィオラ [1951・次段落のバイクと並ぶビデオ・アートの第一人者] は、デジタル技術が発展するにつれて、だいにビデオの「記憶の粗雑さ」が減っていったと主張する。そのうえで彼は、ビデオからコンピュータへの移行を、知覚を支援する機械（ビデオ）から知を支援する機械（コンピュータ）への移行と捉えている。

しかし、われわれは、さしあたりテレビについて考察を進めることにしよう。テレビは、ナム・ジュン・パイク [1932-2006、現代美術家で、ビデオ・アートの先駆者] が述べたように「それなしにはコミュニケーションを開始することさえできない」道具になっており、あらゆる表現関係にそなわる出来事の次元を否定し、抑圧するものになった。ビデオのテクノロジーは、つねに持続にたいして作用する装置である。厳密に言えば、それは映画のテクノロジーと異なり、直接的なかたちでしか、つまり出来事のなかにしか存在しない。というのも映画のばあい、その時間は明らかに差延された時間（録画された過去の時間）であるが、それにたいして電波ネットワークやデジタル・ネットワークのばあいは、ビデオカメラを使うことによって、今まさに起こりつつある時間を扱うことができるからである。そのことにより、テレビは「現実時間」に介入する可能性を手中にする。いいかえれば、それは世界のさまざまな持続のうちに介入するために、あるいは起こりつつある現在に作用するために、その時間を独占し、利用する可能性を手にするのである。したがってテレビは、現在進行しつつある時間をコントロールし、二重化するための装置である。公衆はテレビによって、コミュニケーションのなかに収容されているだけではない。彼らは、そもそもテレビによって根底からつくりだされた出来事の時間のなかに収容されているのである。

* * *

表現機械は、二つの仕方で時間に介入する。第一に、それは出来事をそれ自体でつくりだすような仕方である。第二に、それは出来事の現働化を調整し、コントロールしようとするような仕方である。メディアによる出来事の創造は、時間を分岐させることなく、あらかじめ定められた選択肢にしたがって時間を凝固させるものである。メディアがつくりだした出来事は、問いを促すこともなければ、解決方法の発明を促すこともなく、ただ公衆にたいして選択肢を「提供する」だけである。コントロール社会において、差異は、マーケティングや統計調査、広告、情報によってあらかじめつくり、用意された選択肢の多様性のうちに還元されてしまう。

第3章でわれわれが考察したのは、表現機械が時間に介入する第一の様態である（メディアによる偽の出来事の創造）。それにたいして、われわれが9月11日 [2001年に米国で連続テロ事件が起こった日] にまざまざと見せつけられたのは、その第二の様態である。

つくりだされた出来事のあいだで宙吊りにされた空虚な時間は、人々の精神のうちに不安と動揺を引き起こす。そのような状態にある人々にたいして、表現機械は「過去に起こったこと、現在起こっていること、これからの未来に起こること」を、イメージと音を駆使して語りつづける。出来事の不確実性と予測不能性は、まず記号と言語、イメージによって表現される。そして——わずかな浮遊する時間の後で——あらかじめメディアが用意した滑稽な二者択一⁹⁾が示されることになる。すなわち、善／悪、はてしない戦争／テロリズムへの協力、文明的な西欧／野蛮なイスラム、などの二者択一である。

市場がもたらす「無限」の選択は、そのような政治的二者択一（善か悪か）の狭い隙間のなかにある。なぜなら市場もまた同じ戦略を採用しているからである。すなわち、可能性の創造を搾取し、問題を構成する能力と社会的諸力とを分離し、あらかじめ用意された解決策を押しつける戦略である。このような無力化は、出来事の表現のあり方を操作する作業であり、ジャーナリストや軍人、政治家、専門家たちがおこなっている作業である。われわれはテレビ画面や新聞、ラ

ジオをつうじてその作業がえんえんと続けられる様子を眺めている。そこでは、いつもどこかが歪められた、メディアがつくりだす単調な時間が流れている。

以上に述べたようなメディアによる出来事の実現によって、戦争への道が開かれ、それ以外の可能性は無力化されてしまった（たとえば、グローバル化を導いている新自由主義^{ネオリベラリズム}の政治や経済的選択にかんする議論は、もはやメディアによって無力化されてしまっている）。しかし、それでも出来事は、メディアがつくりだした力とは別の力をそなえ、メディアとは異なる仕方ですこく作用する（それは、ドゥルーズの用語を使うなら「反・効果として作用する」）。出来事にそなわる力は、別の表現機械をつうじて時間と空間にまたがる固有の動的編成を構成するからである（イラク戦争に反対する2月15日 [2003年] の世界宣言は、もうひとつのメディアが働いた結果である）。

テレビとメディアによってつくり、管理された出来事は、いかなる可能性も生みだすことがなく、たんに意味を独裁的に生産するための出発点を構築するだけである。それが目的としているのは、あらゆる言表から独立しているような単一の言表主体を形成することであり、多数の合意からなる公衆が形成されるようなスローガンの出発点をつくることである。

この出発点やきっかけとなる意味は、出来事のさまざまな創造的機能を搾取し、無力化することによって「演出された」ものである。映画やラジオ、テレビ、インターネットにおける創造的機能は、すくなくとも潜在的には、もはや作者（とその権利）を必要としなくなっている。それらの創造的機能は、主体とそのコミュニケーションや表現の様態にかんして、再コード化されたものである。「書物や思想が作者の機能を捨て去り、創造行為がもはや作者の機能を必要としなくなったまさにそのとき、その機能はラジオやテレビ、ジャーナリズムによってふたたび利用されるようになった⁹⁾」。

中央集権的な金融権力とテクノロジーの独占は、表現の動的編成に作用を及ぼし、マーケティングや情報、広告、統計調査の出発点あるいはきっかけとなるように、作者の機能を作り変えている。

コントロール社会は、多様性を表現し構築する力を統合し、誘導する。その統合と誘導は、多数多様に特有のさまざまな可能性を創造し普及させる能力を切り離すことによって実行されている。それこそ、現代の資本主義が人々を収容する形式なのである。

原註

- 1 Nam Jun Paik, *Du cheval à Christo et autres écrits*, Ed. Lebeer Hossman, 1993, p.110.
- 2 Mikhail Bakhtine, *Esthétique et théorie du roman*, *op.cit.*, p.96. [ミハイル・バフチン「現代の文体論と小説」伊東一郎訳、『ミハイル・バフチン著作集5 小説の言葉』所収、新時代社、1979年]
- 3 Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Mille Plateaux*, *op.cit.*, Voir le chapitre «Micropolitique et segmentanté» [ドゥルーズ+ガタリ『千のプラトー：資本主義と分裂症』、第9章「ミクロ政治学と切片性」、宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳、河出書房新社、1994年]
- 4 次の拙論を参照。「La machine de guerre du Ciné-œil et le mouvement des Kinoks lancés contre le spectacle», *Persistances*, n-4, 1998.
- 5 Mikhail Bakhtine, *Esthétique et théorie du roman*, *op.cit.*, p.186. [ミハイル・バフチン「現代の文体論と小説」前掲書所収]
- 6 Ibid. [ミハイル・バフチン、同書]
- 7 Andreï Tarkovski, «Le temps scellé», *Les Cahiers du cinéma*, 1989, p.59.
- 8 Bill Viola, «La vidéo», *Communications*, 1982, p.72.
- 9 Gilles Deleuze, *Deux Réimes des fous*, *op.cit.*, p.130. [ドゥルーズ『狂人の二つの体制』宇野邦一監訳、河出書房新社、上下巻、2004年]

* この論考は、マウリツィオ・ラツァラート 著『出来事のポリティクス——知 - 政治と新たな協働』（洛北出版）の第4章の一部を抄録したものです。より正確な理解のためには、本書籍をご覧ください。ご感想をお勧めします。

この論考と関連する書籍としては――

ガブリエル・タルド『模倣の法則』（池田祥英・村澤真保呂訳、河出書房新社）

バオロ・ヴィルノ『マルチチュードの文法』（廣瀬純訳、月曜社）

同著『ポストフォーディズムの資本主義』（柱本元彦訳、人文書院）

ジル・ドゥルーズ『記号と事件』（宮林寛訳、河出文庫）

ミハイル・バフチン『ドストエフスキーの詩学』（望月哲男・鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫）などがある。

マウリツィオ・ラッツァラート (Maurizio Lazzarato)

1955年、イタリア生まれ。社会学者、哲学者。現在はパリで働きながら、非物質的労働、労働者の分裂、社会運動などについて研究を行なっている。

アントニオ・ネグリやヤン・ムーリエ＝ブータンらとともに、フランスの政治思想誌『Multitudes』の創刊以来の編集委員でもある。

非常勤芸能従事者や不安定生活者などによる連携組織の活動にも参加している。また、フランスにおけるガブリエル・タルド著作集発行の中心人物のひとりで、タルド研究者としても知られる。

邦訳書として、『出来事のポリティクス——知-政治と新たな協働』（村澤真保呂・中倉智徳 訳、洛北出版、2008年）がある。

邦訳論考として――

「『未来は長く続く』とルイ・アルチュセールはいった、今日、トニ・ネグリはこの未来の征服に再び旅立った」（アンヌ・ケリアンとの共著、市田良彦訳、『インバクシオン』106号所収、1998年、インバウト出版会）

「『マイノリティ』の闘争と欲望の政治」稲葉奈々子訳、『現代思想』2000年4月号所収、青土社）

「マルチチュードとは何か マルチチュードと労働者階級——マウリチオ・ラッツァラートからバオロ・ヴィルノへの問い」（バオロ・ヴィルノとの共著、箱田徹訳、『現代思想』2003年2月号所収、青土社）

「所得を保証すること——マルチチュードのための政治」（『VOL 02』2007年所収、以文社）

「世界を創造する——現代資本主義と『美的／感性的』な戦争」中倉智徳訳、『現代思想』2008年6月号所収、青土社）がある。

この号に原稿・データを提供いただいた洛北出版のご厚意に感謝します。

なお、「VOL」zine はすべて以下から閲覧・製作が可能です。

<http://conflictive.info/contents/volzine.htm>

「VOL」3号は2008年6月下旬刊行の予定です。